

出エジプト記 12 : 1～20

ルカによる福音書 22 : 1～13

「過越しの食事」

【前奏】

【招詞】 申命記 6 : 4～5

【祈祷】 司式長老

【聖書】 出エジプト記 12 : 1～20、ルカによる福音書 22 : 1～13

【説教】 「過越しの食事」

<十字架の意味>

今日から 22 章に入ります。これから 23 章にかけて、イエスさまは、弟子たちと最後の晩餐を囲まれた後、裏切られ、逮捕され、裁判にかけられ、十字架の死へと向かわれます。

22 章の 1 節には、「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」とありました。ルカによる福音書はここで、イエスさまのこれらの出来事が「過越祭」というユダヤ人の重要な祭りの間に起こったことを強調しています。それは、過越祭が、イエスさまが血を流して殺されることの意味を指し示しているからです。

<過越祭と言われる除酵祭>

過越祭とは、今日読まれた旧約聖書の出エジプト記 12 章に語られていたように、イスラエルの民が年の初めの月に守るお祭りです。

イスラエルの民は、エジプトで奴隷として苦しめられていました。神さまはその苦しみの叫びを聞かれ、モーセという人物を導く者として選び、エジプトから解放して下さったのです。その時、エジプトのファラオは、中々イスラエルの民が出て行くことを許しませんでした。そこで、神さまはエジプトにいくつもの災いを下されます。

その最後の災いが、エジプト中の初子を撃つ、という災いでした。それは出エジプト記の 11 章に語られています。この災いによって、とうとうファラオは、イスラエルの民がエジプトを出て行くことを認めたのです。

その際に神さまは、イスラエルの民に、小羊を屠って、その血を家の入口に塗るように命じられました。その小羊の血を塗ってある家は、神さまがエジプト中の初子を撃つ時に、その家を過ぎ越して、災いを及ぼさないようにして下さったのです。

このようにしてイスラエルの民は、神さまによって、エジプトの奴隷の家から解放され、救われました。だから、この出来事を記念して「過越祭」と言います。

また、ルカの 1 節では「過越祭と言われる除酵祭」とありました。

除酵祭り、つまり酵母を抜いたパンの祭りです。これもまた、エジプトから解放された時に、急いで出発しなければならなかったため、パンを発酵させる時間がなく、酵母を入れないうでパンを焼いたため、と言われていています。つまり除酵祭もまた、神さまがイスラエルの民をエジプトから解放し、救い出して下さったことを記念する祭なのです。

#### <屠られる小羊>

そのように、旧約聖書の時代、神さまがエジプトの奴隷の家からイスラエルを解放して下さる時に、その救いの御業が実現のために、小羊が屠られ、その血が流されました。

そしてそれと同じように、これから神さまが、すべての罪人、つまりわたしたちを、罪の奴隷の家から解放して下さるといふ時。その救いの御業の実現のために、まさにイエスさまが、その過越しに屠られる小羊となって下さるのです。

イエスさまがこれから十字架で流される血は、わたしたちが救われるために。神さまがわたしたちを救って下さるご計画のために、流される血なのです。

イエスさまが十字架の出来事が、まさにこの過越祭の時に起こった、ということは、まさにそのことを指し示しているのです。

#### <過越しの食事を準備なさるイエスさま>

次週に語られるルカ 22 章 14 節以下は、この過越祭を祝う食事の場面です。そしてそれは、イエスさまと弟子たちとの最後の晩餐となります。

そして、かつてイスラエルの民が、過越祭をエジプトから解放され、救い出された記念としてこの過越しの食事を守ったように。

イエスさまの十字架と復活が成し遂げられて以降、すべての教会は今日(こんにち)まで、イエスさまによって罪と死から解放され、救い出された記念として、この最後の晩餐を覚え、聖餐の食卓として守り続けているのです。

この最後の晩餐の席で、イエスさまは御自分の十字架の意味が、まさに過越しに屠られる小羊としての意味があることを、弟子たちに教えられます。それは次週に聞きましょう。

今日の箇所では、イエスさまがそのために、この過越の食事を、ご自分で整え、準備なさったことが記されているのです。

7~8 節にはこのようがありました。「過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た。イエスはペトロとヨハネとを使いに出そうとして、『行って過越の食事ができるように準備しなさい』と言われた。」

この場面はマタイやマルコ福音書にも語られていますが、そちらでは弟子たちの方から「過越の食事の準備はどうしましょうか」と聞いています。しかし、ルカはイエスさまの方から準備をしようとなさったことを強調しています。

そして、ペトロとヨハネを使いに出そうとして、二人が「どこに用意いたしましょうか」と尋ねると、こう答えられました。

10 節「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家までついて行き、家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。」

そして、二人が行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した、とあるのです。

これらの出来事を、イエスさまがすべてを予見した奇跡のように解釈する人もいます。

しかし一方で、席の整った広間を見せてくれた家の主人が、もともとイエスさまの大勢の弟子の一人であり、前もって話をつけておられた、という解釈もあります。水がめを運んでいる男、というのは、当時は水がめを運ぶのは女性の役割だったので、分かりやすい目印となります。そういう打ち合わせをしておられたのではないか、というのです。

おそらくそのように、イエスさまご自身が、過越の食卓を整えるためにご計画なさり、これと思われた者に声をかけて、用意を頼んでおられたのだと思います。

そして、いよいよ過越の食事の席で、これから起こることの意味を、イエスさまは弟子たちに教えられるのです。

<弟子たちとの食事を切に願って>

過越祭は、家族で守るお祭りです。このためにイエスさまご自身が、準備をなさった。それはつまり、エルサレムに入られてから、大勢の民衆に囲まれて、教えを語ってこられたイエスさまが、最後の最後に、選ばれた愛する弟子たちと共に、親しい、深い、愛の交わりの食卓を求められた、ということなのです。

次週読まれる 15 節で、イエスさまは「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」と語っておられます。切に願っていた。

これからイエスさまは、救いの御業を実現するために、十字架の苦難と死へ向かって、歩いていかれます。父なる神さまの救いのご計画に従って、イスラエルの民の救いの出来事から指し示されて来た、世のすべての人を救う御業の実現のために、ご自分の血を流そうとしておられます。

思えば、「救いの業」と聞くと、普通は何か、英雄的な行いをすることや、戦いに勝ち抜くこと、何かをすること、為すこと、を想像するように思います。

しかし、イエスさまの場合、神さまの救いのご計画を実現することとは、最後にひたすらご自分の身に苦しみを引き受け、耐え忍び、やがて死を受け入れる、ということだったのです。

イエスさまが成し遂げて下さったことは、わたしたちの痛み、罪、そして死を、すべて受け入れて下さるということです。

その破壊的な罪に、想像を絶する痛みに、滅びへと至る死に、わたしたちのために耐えて下さる、ということです。

そうして神さまの御心に、救いのご計画に、御自分をすべてお委ねになること。小羊として屠られること。それが、イエスさまがわたしたちのために成し遂げて下さったことでした。

そしてイエスさまは、弟子たちにもまた、このように神さまの御心を受け入れて歩いていくこと。そして、そのことを通して、神さまが救いの御業を実現し、必ず勝利を与えて下さるということ、共に見つめたい、共に祈りたい、と望んでおられたのではないのでしょうか。

これからイエスさまの逮捕、裁判、そして処刑と、あっという間に事が展開していきます。それを目の当たりにする弟子たち。それはただただ、悲しみと、恐れと、不安に満ちたものとなるでしょう。

しかし、神さまの救いの御業は、救いのご計画は、必ず実現します。

まさに小羊の血によってイスラエルの民が救い出され、神の民としての歩みに招かれたように。これから流されるイエスさまの血によって、まさに弟子たちが、またすべての人が、罪と死から救い出され、新しい神の民としての歩みに招かれていくのです。

イエスさまは、弟子たちがこの苦難に耐えるように。そして、ご自分の十字架による救いの実現にあって、弟子たちがこれまでのことをすべて悟り、罪の赦しと、新しい命への招きに応えることが出来るように。切実な思いで、深い愛を持って、弟子たちの歩みのために心を砕いておられたのではないのでしょうか。

#### <人の計画、思い>

こうして、神さまの救いのご計画は、イエスさまの十字架に向かって進んでいきます。

神さまは、御子イエスさまの十字架の死によって、お造りになったすべての者を愛し、その罪を赦して下さることを示して下さいます。そして、罪人をご自分の御許に立ち帰らせ、神の子として、神と共に生きる者となることを望んでおられます。

そのために、救いのご計画を、必ず成就させて下さるお方です。

#### [ユダヤ人の指導者たち]

しかし一方で、この神さまの救いのご計画が進められている中、罪に捕らえられた人の思い、人の計画が交錯していたことを、ルカは記しています。

22：1～2にはこのようにありました。「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた。祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。」

祭司長たちや律法学者たち。イスラエルの民の子孫であり、また民を指導する立場の人々が、イエスさまを受け入れられず、敵意、殺意が高まり、殺そうとしていた。それは、これまでのところにも繰り返し記されてきました。

しかし彼らは、イエスさまの教えを喜んで聞いている民衆を恐れて、中々手が出せないでいたのです。しかも、大切な過越祭の間に殺害すれば、ますます民衆の反感を買うかも知れません。

同じ場面が描かれているマルコ福音書 14：1～2 は、露骨にこのように記されています。「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。彼らは、『民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう』と言っていた。」

「民衆が騒ぎだすといけないから、祭りの間はやめておこう。」祭りが終わってから、やっちなお。これが、祭司長、律法学者たちの思惑でした。

[ユダにサタンが入った]

しかしここで、あることが起こるのです。

ルカの 22：3 以下「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。」

イエスさまの十字架の死は、すべての人の救いのために、過越の小羊として屠られる出来事なのであり、神さまの救いのご計画の実現であるゆえに、過越祭に実現すべき事でした。

しかし、イエスさまに敵対する祭司長、律法学者たち、この指導者たちは、祭りの間は何もしないでおこう、と考えていたのです。

そこに、ユダがイエスさまを引き渡す相談を、祭司長たちに持ちかけた。そのために、思いがけない形で、神さまのご計画通りに、過越祭の時にイエスさまの十字架の死が実現することとなったのです。

このことは、いつもわたしたちにつまずきを与えます。

そうであるなら、ユダはむしろ裏切ることによって、神さまの役に立ったのだろうか。あるいは、神さまが御自分の計画通りに進めるために、ユダにそのようにさせたのだろうか。

しかし、聖書ははっきりと「ユダの中に、サタンが入った」と記しています。

イエスさまを裏切り、背き、見捨てること。つまり、神さまに罪を犯すこと。そのようなことを、神さまがユダに意図的にさせるはずがありません。

サタンとは、人を神さまから引き離そうとする力のことです。罪を犯させる力のことです。人間は、そのような力に、引き込まれてしまうことがあるのです。

これまで、ユダが何故イエスさまを引き渡したのか。様々なことが考えられてきました。ユダは、イエスさまがイスラエル王国を復興する王として期待しており、中々そのように動き出そうとしないイエスさまに失望し、見限ったのだ。

あるいは、イエスさまが、殺されそうになってギリギリの状態になったら、きっとそこで

立ち上がって下さると期待して、わざと追い詰めたのだ。

あるいは、ユダは弟子たちのお金の管理をしているうちに、お金の虜になって、お金のためにイエスさまを売ったのだ。

わたしたちは、理由を知りたいがります。それは、自分がそうなるのが怖いからです。そして、理由を見て、それなら仕方ないと、ユダに同情的な気持ちを抱くことさえあるのです。

しかし、ルカは、ユダが裏切ったこと。そして、使徒言行録で、悲惨な死に方をしたことを記すのみです。

つまり、こうして「サタンが入る」というのは、誰にでも起こり得ることなのです。理由がはっきりと分かる訳ではないのです。そして、それは仕方のないことではありません。れっきとした罪であり、神さまへの背きなのです。神さまに頼るのをやめる。イエスさまに失望する。神さまの愛を疑う。罪の力に支配されてしまうことは、罪人のわたしたちに、確かに起こり得ることなのです。

#### <神の支配>

5節には「彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた」とあります。

ユダの裏切りによって、指導者たちは喜びました。イエスさまを殺すことが出来ると、喜んだのです。神さまから離れてしまった人々が、このようなことに喜びを覚え、熱心になっていく。イエスさまの十字架の前には、まさにこのような罪に支配された人間の姿が、はっきりと描かれているのです。

しかし、これから語られていくのは、ユダと指導者たちの罪に満ちた計画が、神さまの救いのご計画に覆われていくということです。

イエスさまがこれまで語られてきたことは、「神の国」、つまり「神の支配」です。イエスさまは、神のご支配を実現するために来られた神の御子です。

サタンの支配に捕らわれた人間を、これから神の御子イエスさまが、ご自分の十字架の血によって、滅びを免れさせ、罪と死から解放し、神さまと愛の恵みのご支配へ招いて下さるのです。

わたしたちの弱さよりも、愚かさよりも、深い罪よりも、サタンの力よりも、死の力よりも。神さまの愛の力の方が、どれほど強いのか。どれほど圧倒的なのか。どれほど果てしないのか。

それが、まさにイエスさまの十字架の死と、そして復活の出来事に、示されていくのです。

わたしたちが見つめるべきは、サタンの力ではありません。ユダの弱さではありません。人間の悲惨さではありません。

わたしたちが見つめるべきは、そのように罪に支配されたわたしたちを、愛と恵みによって覆い尽くして下さる神さまであり、そのために十字架の御業を成し遂げられたイエスさまなのです。

今わたしたちは、受難節の日々を歩んでいます。世界の多くの苦しみ、悲しみ、悲惨さを目にする日々です。人の罪の愚かさを思います。また、自分の罪を見つめさせられます。

しかし受難節は、まさにこのわたしたちを罪から解放するために、救い出すために、受難の道を歩まれ、その血を流して下さった十字架のイエスさまを、見つめるための時なのです。

罪の支配を打ち破って、神さまの愛のご支配こそが、確かにわたしたちを覆って下さっていること。わたしたちの思いを超えて、神さまの恵みの御心、神さまのご計画こそが実現するということ。わたしたちは、そのことをはっきりと示されています。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまが流された血によって、わたしたちを罪から解放し、救い出して下さったことを感謝いたします。

わたしたちの罪に満ちた愚かさな計画よりも、あなたの恵みに満ちたご計画こそが、わたしたちの思いを超えて実現することを知らされました。

サタンの誘惑に弱く、今もなお罪を犯すわたしたちですが、イエスさまの十字架と復活によって、わたしたちが今やあなたの愛のご支配の中で、罪を赦され、新しくされ、神の民として生かされていることを信じます。そのしるしとして、主の聖餐の食卓に招かれていることを感謝いたします。

どうか、一人でも多くの人たちが、神さまの愛のご支配を知り、イエスさまの救いを信じ、共に主の招いて下さる食卓に着くことが出来るように、聖霊によって導いて下さい。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 4 4 1 「信仰をもて」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 2 8 「み栄えあれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン